
やあ！やあ！ジャン

青山 黒美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やあ！やあ！ジャン

【Nコード】

N5769V

【作者名】

青山 黒美

【あらすじ】

あらすじ書くのが億劫だ。書き方がわからない。戦争とか愛と平和を描いたかもしれません。自分じゃわかりませんでした。

喫茶店のテラスにて、私はジャンと待ち合わせをしていた。

「やあ」

ジャンが私に声を掛ける。

「やあ」

私が返事を返すと、彼は椅子に腰をドサリと落とす。相変わらずのふてぶてしい格好だった。コートは穴だらけ、サファリの帽子はよれよれで、これもまた所々綻んでいる。

ジャンの服装にジョークをとばすのが、私の挨拶がわりだった。

「ジャングルでの生活は最近どうだい？」

「ん？ ああ……、こないだ。ほら、ここ……また穴が一つ増えたよ。屋根裏の小さなライオンには、まいったね」

彼は顔をニタニタさせながら店員に声を掛ける。

この顔が私の中で彼を表すのに必要不可欠、最後までこんな調子の男だった。

彼と初めて出会ったのは数年前、ジャンは路上でギターを弾いていた。この先にあるパン屋の前で胡座をかいて歌っている所を、私は何度か見かけて、そのたびに通り過ぎていた。

しかしある時、彼の歌詞がふと耳に入ってきた。私は音楽には興味が無かったのだが、戦争を扱う彼の歌詞は少し面白いなと感じた。この頃、新聞で戦争の拡大化が危ぶまれている事が書かれ始めていた時でもあったのだ。

私は立ち止まって彼を見ると、随分とみすばらしい格好をしているなと思った。そして左手を使っていない事に気付いた。数曲聴いたのだが全部同じギターの音で弾いている。

それが彼に話掛けるきっかけにもなった。

ジャンは注文したコーヒーに手を付けた。この時、決まって私は視線を、彼の後向こうへとやる。彼がコーヒーを口に運ぶ間に、カップの中身の大半が、テーブルへとベチャベチャ落ちる。

彼の体は不自由だった。特に左半分、左の足は走れずにいる程度だが、左腕は完全に麻痺している。それに右手には震えを持っていた。それが生まれた時からなのかは私は知らない。

いつだったか彼が私に自らこんな話をした。

「俺がカップの中身を溢すだろ。そうすると辺りの奴等は俺を見て可哀想な奴だな、見たいな目を向ける。子供は指をさす。この間の男連中なんかは大声で笑ってくれやがる。

そんなたびに俺は思うんだ。俺が歌を歌ってもお前らは素通りなのにつてさ……。寂しいもんだよ」

これは私が彼から聴いた最初で最後の、弱音だったのかも知れない。

彼がコーヒーをテーブルに置くと言った。

「女ができたよ」

私は驚いてしまった。そして訊いた。

「本当か？」

「ああ、本当さ。とても優しい娘でね。今度、紹介するよ」

「そうか、わかった」

だが結局、紹介のないまま、数ヶ月たったある日に彼はまた私を驚かせた。

「実は戦争に行く事になった」

「え！」

「少し前にね、志願兵募集の張り紙を見たんだ。兵隊になったよ。」

こんな俺でもなれるもんだな」

「何故!？」

「金が要るだろ。結構、貰えるんだぜ。兵隊さんって」

「何処へ行く?」

「知らないよ。あちこち戦争してるから」

「いつ頃?」

「わかんないけど早いと思う。だから住所教えてくれ手紙書くから」

「わかった……。でも金って、女の為かい?」

「うーん……。ほんととはさ子供からの夢なんだよね。兵隊さん。英雄とか、カッコイイだろ」

「ふざけるな!」

「……すまん。けど……。金はあつた方がいいのさ」

ジャンと会ったのは、これが最後だった。

そして約束通り手紙は届いた。その手紙の内容は、いつもの彼らしく私は返事に困るものばかりだった。それに下手くそな字にも。

『兵隊になって、少しは旨いもんが喰えるんじゃないかと思った。とんだ勘違いだぜ、まだゴミ箱あさってた時の方がマシだ。だって味がしないんだぜ』

『銃って重たいのな。ギター、五、六本は持つてるんじゃないかって感じるよ。銃っていくらするんだろうな。これもギター、五、六本かな? 調べて書いてよこしてくれ。案外に暇なのさ、ドンパチやる以外無いんだから』

『こないだヘルメットに弾が当たった。カコンッ、だってさ。安っぽい音だぜ。ビンの中に小銭入れた時みたいな音でさ、思わず笑っ

たよ。安心してくれ、手紙には当たらないようにするから』

こんな馬鹿な事ばかり書いてよこす。手紙の送られて来る間隔が長くなり始めたと思うと、少し汚れた手紙が届いた。これが、彼からの最後の手紙だった。

『実は、女にお前の住所を教えたよ。もし来たら話して聞いてやつてくれ。金はどうだろうか、足りるといいんだが。

やっぱりお前には彼女の事を話しておくよ。俺の歌を聴いてくれたんだ、最後まで。初めてだった。嬉しかったね最高に。話てるうちに仲良くなって好きになった。

そして、彼女が金に困っている事を知ったんだ。自分の体売るほど。このことは彼女には秘密だぜ。ナイーブなのさ。優しい娘だよ。だから金が欲しかった。やめて欲しいと思った。俺みたいな奴が金を稼ぐには命懸けしかないって。

金を貰えた事には感謝してる。でも戦争はやっぱり可笑しいよ。

悲しいんだ。あっちゃいけない。

夢を見た。人が笑ってる。笑顔だった。

怖い。あいたい』

戦争は終結したらしい。新聞にはそう書いてあった。

私は戦争を知らない。

兵隊達が帰って来ると私は勿論、彼を探した。英雄達が列をつくって歩く。それを見る人々の群れ。その中に彼女はいた。

彼女が私の所へ来ることは無かったが、私は彼女を知っている。一

度、見たただけだが、忘れる筈のない光景だった。

あれはジャンが旅立つ何日前だろうか。

私があのパン屋の道を通って帰ると、人が何人か集まって立っていた。そこからジャンの歌が聴こえてきた。

私はそのとき不思議に思った。ジャンの歌を立ち止まり聴く人があんなにいることに。

私はジャンに見つからないように上手く人の背中に付いて彼を覗き見た。

その光景を見た時、自分が何処にいるのか、わからなくなった。

彼が石段に座るその横に女は寄り添っていた。そして女は彼の弾くギターの弦を押さえたり、はなしたりして音を変えている。

その時の私はただ見ているだけだった。

今の私がそこにいたのなら、街中の人に言うてやりたい。

「おい！　これがなんだかわかるか！？　

見てやってくれ！

ジャンを見てやってくれ！

今！　今だよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5769v/>

やあ！やあ！ジャン

2011年10月8日11時01分発行